

# カ・ナ・ダ・の・先・端・技・術



ハイテクノロジー。先端技術というこの一語で要約される、マイクロエレクトロニクス、電気通信、光通信、生命工学などは、先進工業諸国がしのぎを削っている領域である。カナダでも、マイクロ波通信衛星、スペースシャトルでその性能が確認された遠隔操作システム、デジタル交換機、文字図形情報システム「テリドン」、短距離離着陸機やビジネス・ジェット、資源開発機器などに見られるように、すでに新しい技術革命が進行中だ。先端技術産業は、カナダの国民総生産のほぼ1割を占めており、今後の発展が大きく期待されている。世界コミュニケーション年を迎え、通信を中心にカナダの先端技術を集めてみた。

## 花開くコミュニケーション技術

### カナダ・ハイテクの旅から

武部 俊一

「The medium is the message」などの名言で一世を風靡したのは、トロント大学のマーシャル・マクルーハン教授だった。あれからもう二十年近くたつが、彼の予告した情報化社会は、ますます高度化し、テレコミュニケーションとコンピュータを結んだニューメディア時代を迎えようとしている。

そのなかにあつて、カナダの情報通信技術は、常に世界のトップを歩み、社会への定着の面でも先進的な役割を果たしてきた。昨年、連邦政府の招きで訪れた「ハイテクの旅」でも、この分野に賭けるカナダ政府、産業界の積極的な姿勢が最も印象的だった。

この国がコミュニケーション技術に力を入れてきたのは、強いニーズがあつたからだと思われる。ソ連に次ぐ広大な国土、はるかな北極圏の村、アングロフォン、フランコフォンはじめ多様な言語文化が混在するモザイク社会……。それをしつかり結びつけるためには、通信衛星、光通信などの太いパイプが欠かせない。オタワにあるテレサット・カナダの衛星コ

ントロール・センターを訪問したとき、マikel・ブライアン広報室長は「距離を文化の障壁にしないことがわれわれの使命だ」と語っていた。

日本は、この二月四日、初の実用静止通信衛星「さくら2号a」を打ち上げた。この分野で、カナダは大先輩で、一九七二年にアニックA1号を打ち上げている。これは米ソよりも早く、世界初の国内用静止通信衛星だった。打ち上げこそ米国のロケットに頼っているものの、高度な衛星利用技術にかけては、定評がある。カナダは早くから宇宙へ目を向けた。

「カナダの人たちでさえ、その先駆的な業績を知らない」とブライアンさんは嘆くのだが、ソ連、米、英に次いで、六二年に世界で四番目の衛星保有国になっている。アルエット、ISISなど四個の衛星で電離層観測に先鞭をつけながら、衛星技術を磨いた。これを基盤に、六二年、テレサット・カナダを設立して、衛星通信に乗り出した。

テレサット・カナダは、政府と電話会社 halves ずつ出資する半官半民の会社で、